

12月7日 待降節第2主日

バル 5:1~9 フィリ 1:4~11 ルカ 3:1~6

1. ルカ

預言者イザヤの書に書いてある通りに、洗礼者ヨハネに神のことばが降って、彼は救い主イエス・キリストの出現に備えて悔い改めの洗礼を宣べ伝えました。教会は待降節第二主日のミサで、この福音書の記事の朗読を聞いています。それは私たちが神の救済史の遠大な計画に心を向けて、御子の第一の来臨を追憶すると同時に、その第二の来臨に備えるためであります。

洗礼者ヨハネが荒れ野に現れたのは、紀元 30 年頃でありました。ここで彼の道備えの働きを預言したものと引用されている イザ 40:3-5 は、紀元前 6 世紀半ばの無名の預言者のものです。そして私たちが福音によって信じているキリストの再臨の希望は、今なお歴史の将来の事柄であります。この遠大な神の救済史の中で、教会は今年も待降節から降誕節へのもろもろの行事とミサの一つずつを体験して行くのです。

2. フィリ

教会はキリストの福音を信じて洗礼の秘跡によって救われた人々の群れであって、この福音の希望(ロマ 8:24、コロ 1:23)の中で共にミサをささげています。「あなたがたの中で善い業を始められた」(v.6) と述べられている内容をより具体的に説明すれば、次のようになります。

「あなたがたは、以前は神から離れ、悪い行いによって心の中で神に敵対していました。しかし今や、神は御子の肉の体において、その死によってあなたがたと和解し、御自身の前に聖なる者、きずのない者、とがめるところのない者としてくださいました。」(コロ 1:21-22)

使徒パウロはフィリピの教会の信徒に向けて、「キリスト・イエスの日までに、その業を成し遂げてくださると、わたしは確信しています」(v.6) と語りました。それはより明確な表現に置き換えると次のようになります。

「主イエスを復活させた神が、イエスと共にわたしたちをも復活させ、あなたがたと一緒に御前に立たせてくださると、わたしたちは知っています。」(II コリ 4:14)

ミサの朗読の中からは省略されている v.7 で、使徒パウロはお互いがキリスト者であることの意味を、「共に恵みにあずかる者」と表現しました。神の国の相続人である教会は、キリストの再臨の日に備えて共に待ち望んでいる群れであります。この将来への希望こそが、教会の存在の根拠なのです。

「しかし、わたしたちの本国は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています。」(フィリ 3:20)

「ただ、揺るぐことなく信仰に踏みとどまり、あなたがたが聞いた福音の希望から離れてはなりません」

ん。」(コロ1:23)

3. バル

エルサレムがバビロンの王によって焼き払われて南王国が滅亡した紀元前587年から5年後に、バルクによって書かれたとされているこの書に、神の終末的なエルサレム再建の希望が語られていることに、私たちは驚きを禁じ得ません。民の中の貧しい者の一部だけを残して、殆どの上中流民がバビロンに捕囚として連れ去られたという民族存亡の危機のただ中で、神はバルクにこの預言の言葉を語らせられたのでした。

v.7 「すべての高い山、果てしなく続く丘は低くなれ、谷は埋まって平地になれ、と神は命じられた。それはイスラエルが神の栄光に包まれ、安全に歩むため。」

キリストの再臨と神の国の到来を待ち望む現代の教会に向かって、神はこの預言の言葉を通して今朝語りかけておられます。キリストの日に備えることは、教会のこの一年のすべてを貫く基本原則なのです。

アーメン、ハレルヤ。

12月14日 待降節第3主日

ゼファ 3:14~17 フィリ 4:4~7 ルカ 3:10~18

1. ルカ

待降節第三主日の朗読配分は、今や来たり給う再臨のキリストへの待望を人々に証しするものとなっています。洗礼者ヨハネが悔い改めの洗礼を宣べ伝えていたとき彼は、神が旧約聖書の中で約束されたすべてのことを完成するために、“今や来られる方”のことを語りました。

v.16 「その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。」

そしてこの方は「死者の中からの復活によって」(ロマ 1:4)「生きている者と死んだ者との審判者として神から定められ」(使 10:42)、今や再び現れる日を「待ち続けておられるのです。」(ヘブ 10:13)

洗礼者ヨハネの宣教は、この再臨のキリストが来られる日まで、現代の教会に向かって語られ続けています。私たち会衆はこの待降節第三主日に、過去の降誕物語りの中の一つのエピソードとしてではなくて、現在の神からの呼びかけとしてヨハネの説教を聞かなければなりません。

私たちがこの期節にその第一の来臨を追憶する御子キリストは、代々の教会がその第二の来臨を待望して来た終末のキリストと同一の方であります。その日には私たちは「人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを見る」(21:27)のです。

2. フィリ

v.4 「主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい。」

キリスト者の喜び、信仰の喜びは、終末の主から来ます。世の人は多くのことで思い煩い、多くの日常の事柄で苦勞して生きています。しかし信仰のため、教会のために悲しんで来た代々のキリスト者たちは、終末の主によって慰められるのです。その日には再臨のキリストは「彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる」(黙 21:4)のです。

「主はすぐ近くにおられます」(v.5)とは、ここではその来臨の日が近いという意味で語られているのであって、救済史の完成の日への期待を表明しています。使徒パウロがこの手紙で「思い煩うのはやめなさい」(v.6)と書いたとき、恐らくその心の中には マタ 6:25 以下の主の言葉「思い悩むな」があったことでしょう。そして、その主の教えは「何よりも先ず、神の国と神の義を求めなさい」で結ばれていました。

地上の労苦と困難の中を歩むキリスト者の心の平和とは、神の国で実現する平和の先取りなのです。

vv.6-7 「何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう。」

3. ゼファ

この喜びあふれる終末的なエルサレムの回復の歌は、キュロス王によるイスラエルの捕囚民の、エルサレム帰還許可の前後の時代のものである第二イザヤ(イザ 40-55 章)と通じる預言であって、キリスト教会はそこから、御子キリストによって実現した救いと将来の神の国の完成を指し示す神のことばを聞いて来ました。

v.15 「イスラエルの王なる主はお前の中におられる。」

v.17 「お前の主なる神はお前のただ中におられ、勇士であって勝利を与えられる。」

それは、代々の教会の希望である再臨のキリストが実現してくださる終末的な完成の描写です。実に教会はその日を待望している主の民なのだということを、聖書を通して語りかけてくださる神のことばに、今年も私たちは耳を傾けます。 アーメン、ハレルヤ。

12月21日 待降節第4主日

ミカ 5:1～4a ヘブ 10:5～10 ルカ 1:39～45

1. ヘブ

vv.9-10 「第二のものを立てるために、最初のものを廃止されるのです。この御心に基づいて、ただ一度イエス・キリストの体が献げられたことにより、わたしたちは聖なる者とされたのです。」

私たちの救い主イエス・キリストが、時満ちて「御自身をいけにえとして献げて罪を取り去るために」(9:26) 人となって誕生された出来事を、教会は今年も記念します。待降節第4主日の朗読配分は、この過去のただ一度起こった歴史上の出来事に私たちの目を向けさせます。

主イエス・キリストの死と復活が歴史上の出来事であるように、神の子が人となって誕生されたことも歴史の中の出来事であります。実に、私たちキリスト者の救いは、神の救済史を通して実現する“秘められた計画(ロマ 16:25)”に関わるものでありますから、キリストの第一の来臨を追憶する待降節は、終末におけるキリストの第二の来臨への待望と固く結びついています(典礼暦年と典礼暦に関する一般原則 39)。

教会が忍耐して待ち望んでいる(ロマ 8:25)「生きている者と死んだ者を裁くために来られるキリスト・イエス」(II テモ 4:1)は、「御自身の血によって、ただ一度(天の)聖所に入って(私たちのために)永遠の贖いを成し遂げられた」(9:12) 救い主であります。

2. ルカ

v.45 「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いでしょ。」

エリサベトがマリアを賛美しているこのテキストは、初代教会の信仰の中での神の母マリアへの敬愛の一端を、私たちに教えてくれます。マリアは教養や地位の高い女ではなくて、身分の低いはしためであります(1:48)。初代教会が目を留めたのは、力ある神がこのマリアにされた偉大な業でありました(1:49)。律法によってではなく、アブラハムとその子孫への約束を実現するために(1:55)、マリアは祝福された女となって神に用いられました。

この神の救済史の一つの節目に、マリアとエリサベトが立っています。そしてエリサベトの胎内の子ども共に神の御業を喜んでいるのです。私たち会衆もその喜びに参加しようではありませんか。主がおっしゃったことは必ず実現すると信じて。

3. ミカ

預言者ミカはイザヤと同時代の人であります。その主張する立場は非常に対照的でありました。イザヤがエルサレム神殿とそこに臨在されるヤーウエに固く信頼することを語ったのに対して、地方の小村出身のミカはエルサレム神殿の祭儀からの決別を主張しました。出エジプト以来の砂漠の神ヤーウエの正義

と慈しみへの信仰を語ったのです。

政治史における狂乱怒濤の時代であったアハズ、ヒゼキヤの治世、北王国の滅亡と迫り来るエルサレムの危機のただ中で、ミカは将来のメシア出現の地はベツレヘムであると預言しました。

主日A年の朗読配分にはイザヤ書が、主日C年の朗読配分にはこのミカ書のテキストが選ばれていて、そこに共通していることは、見解の相違を超えてただ一つ、救済史を導かれるイスラエルの神ヤーウェへのひたすらな期待であります。主日B年にはサム下7章が朗読されますが、これと共通しているのはダビデの子孫からのメシア出現の期待です。私たちの理解をはるかに超えた神の救済史のスケールの大きさに、圧倒される思いがするではありませんか。

「御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死者の中からの復活によって力ある神の子と定められたのです。」(ロマ1:3-4)

「然り、わたしはすぐに来る。」アーメン、主イエスよ、来てください。」(黙22:20)

アーメン、ハレルヤ。

12月25日 主の降誕

イザ 52:7~10 ヘブ 1:1~6 ヨハ 1:1~18

1. イザ

v.10 「主は聖なる御腕の力を、国々の民の目にあらわにされた。地の果てまで、すべての人が、わたしたちの神の救いを仰ぐ。」

私たちは救われた民であると証しすることが、教会の降誕節の主要なテーマであることを、この期節のミサの朗読聖書は繰り返し語っています。ミサで聖書が朗読されるのは、その朗読を通して神が現在の会衆にキリストの福音を語ってくださっている、その実感が私たちに共有されるためであります。地上の教会のミサで聖書が朗読されるとき、そこに集められたキリストの民が、自分たちに与えられた救いの恵みと将来の神の国の希望を喜び歌うことを、天上のキリストは望んでおられます。

正にこの一点で、主の降誕のミサは世俗のメリークリスマスとは本質的に別のものであることを、ミサの朗読聖書は私たちに語ります。私たちのミサのことばの典礼の中で、神がキリストにおいて私たちに救ってくださったよい知らせを伝える朗読者は幸いです。

2. ヘブ

vv.1-2 「神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました。」

教会にとって降誕節は、既に与えられているキリストの救いの恵みの中で、御子の受肉の出来事の神秘を追憶し、そのキリストが現在は「人々の罪を清められた後、天の高い所におられる大いなる方の右の座にお着きに」(v.3) になっておられることに目を向ける期節であるということが出来ます。

イエス・キリストが神の子と呼ばれることについては、「死者の中からの復活によって力ある神の子と定められた」(ロマ 1:4) と説明されています。ヘブライ人への手紙は、これを旧約聖書の詩編からの数々の引用を用いて弁証しました。教会が今その降誕を祝っている御子は、神が高く上げて「あらゆる名にまさる名をお与えに」(フィリ2:9) になったキリストであります。

3. ヨハ

v.14 「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。」

原始教会の使徒たちは、ヨハネの洗礼のときから始まって昇天に至る地上のイエスの目撃証人でありました(使 1:21-22 参照)。その使徒たちの宣教を通してキリスト者となった次の世代の人々に向かって、ヨハネ福音書は語っています。ですから父の独り子である神が受肉して私たちの間に宿られた …… その栄光

を見た……という宣言は、一般的な意味での目撃証言を超える信仰の事柄、神の恵みを受けた人々の信仰体験であります。実に教会は今もこの信仰体験を共有する群れであり、そのことによってこの世から区別されているのです。

使徒パウロは救われていない人々のことを、「希望を持たないほかの人々」(1テサ 4:13)と呼びました。しかし私たちキリスト者は天の財産を受け継ぐ(1ペト 1:4)神の子の資格を与えられ、「このような希望によって救われているのです」(ロマ 8:24)。この世の人々は、父の独り子である神が受肉して、私たちの間に宿られたことを知りません。しかし事実、受肉された御子は「わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられたのです。」(ロマ 4:25)

私たち現代のキリスト者も、代々のキリスト者と共に、受肉された父の独り子の栄光を賛美しましょう。

「もし、イエスを死者の中から復活させた方の霊が、あなたがたの内に宿っているなら、キリストを死者の中から復活させた方は、あなたがたの内に宿っているその霊によって、あなたがたの死ぬはずの体をも生かしてください。」(ロマ 8:11)

「ただ、揺るぐことなく信仰に踏みとどまり、あなたがたが聞いた福音の希望から離れてはなりません。」(コロ 1:23) 天に栄光！ 地に平和！ ハレルヤ！

12月28日 聖家族

サム上 1:20～28 ヨハ 3:1-2,21-24 ルカ 2:41～52

1.

聖家族の祝日の集会祈願は、「恵み豊かな父よ、あなたは、聖家族を模範として与えてくださいました」という言葉で始まっています。恐らくこの「模範」という表現から、通常は聖家族をキリスト者の家庭の手本として理解することが行われて来たのではないのでしょうか。これに類似する聖書解釈は、他の多くの個所についても従来行われて来ているものです。

しかしこの日の集会祈願は、それに続けて直ちに目を将来の神の国に向け、「あなたの家の永遠の喜びにあずかることができますように」と祈ります。聖家族の模範は、将来の神の国の家族を指し示す教会の希望の姿として、この集会祈願では理解されているのです。

2. ルカ

v.52 「イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人ともに愛された。」

ルカ福音書におけるイエスの幼年期の描写は、神から特別な恵みと祝福を受けた人についての典型的な表現を用いて語られています。

洗礼者ヨハネについて：「幼子は身も心も健やかに育ち、イスラエルの人々の前に現れるまで荒れ野にいた。」(ルカ 1:80)

サムエルについて：「少年サムエルはすくすくと育ち、主にも人々にも喜ばれる者となった。」(サム上 2:26)

モーセについて：「モーセはエジプト人のあらゆる教育を受け、すばらしい話や行いをする者になりました。」(使 7:22)

このように少年イエスの描写は、言が肉となって私たちの間に宿られた(ヨハ 1:14)という観点から物語られているのです。しかしその物語りの中に、他とは決定的に異なる一つの言葉があって、聖家族と他のすべての家族とを区別しています。

v.49 「すると、イエスは言われた。“どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。”」

イエスは神なのです。そして両親は人であります。

3. サム上

エルカナとハンナという夫婦、そしてその子サムエルの物語りは、イスラエルにおける家庭の一つの理想の形であり模範であったと思われます。

イスラエルの信仰の伝統によれば、初めに生まれた男の子は主のものでありました。ですからその子を両親が買い戻す(贖う)という宗教的な行為を経て、自分たちの子として育てるのが普通でした(出 13:11-16)。

ハンナはその子サムエルを自分の許で乳離れするまで育て、それから主の家に連れて行って「生涯主にゆだねられた者」(v.28)としてささげました。そこには家庭の愛が満ちており、イスラエルの信仰が生き生きと働いていました。ルカ福音書における聖家族の物語りは、このようなイスラエルの伝統の中で、サムエルの家庭を一つのモデルにして描かれたに違いありません。

神であるイエスが、肉となって私たちの間に宿られたことに、私たちは特別に注目しなければなりません。

4. 1ヨハ

v.2 「愛する者たち、わたしたちは、今既に神の子ですが、自分がどのようになるかは、まだ示されていません。しかし、御子が現れるとき、御子に似た者となるということを知っています。なぜなら、そのとき御子をありのままに見るからです。」

私たちキリスト者が「神の子」であるのは、約束の形で言われているのであって、それは復活の日に初めて完成するのです(ロマ 8:23 参照)。私たちは人ではありますが、その日には「御子に似た者」「キリストの兄弟」(ロマ 8:29、ヘブ 2:11-12 参照) となるのです。

教会はキリストの祭壇を囲んでミサをささげている(互いに愛し合う)共同体であり、神の国の家族となるように聖霊がこれを一つに結んでくださいます。

v.24 「神がわたしたちの内にとどまってくださることは、神が与えてくださった“霊”によって分かります。」

奉献文の中の「キリストの御からだと御血にともにあずかる私たちが、聖霊によって一つに結ばれますように」の部分は、エピクレーシスと呼ばれ、聖霊にその御働きを祈り求めます。やがてキリストの兄弟となり、神の子とされる神の国の家族を、聖家族の模範が指し示していることを、感謝しましょう。

アーメン、ハレルヤ。